

# フリースクールでの「斜めの関係」が不登校生徒に及ぼす 影響の検討

—インタビュー調査を通して—

A study of diagonal dyadic relationships (Naname Relationships) and  
students who refuse schooling in the Free School :  
Through interview research

山本 絵梨

跡見学園女子大学大学院  
人文科学研究科臨床心理学専攻

Eri Yamamoto

Division of Clinical Psychology,  
Graduate School of Humanities,  
Atomi University

宮崎 圭子

跡見学園女子大学

Keiko Miyazaki

Atomi University

## 【要旨】

本研究では、フリースクールに在籍している中学生にとってフリースクールスタッフ（フリースクールの教師）、大学生ボランティアとの関わりがどのような影響があるのかを質的に明らかにすることを目的とした。調査協力者はフリースクールに在籍している中学生3名であり、この3名に対して半構造化面接を行った。①フリースクールスタッフはどのような存在か、②ボランティアスタッフはどのような存在か等フリースクールに関する質問を設定した。計量テキスト分析を用いて、共起ネットワークの分析をおこなった。共起ネットワークから中心性の高い語の検討を行った。以下のことが明らかとなった。

フリースクールに在籍する中学生にとって、ボランティアスタッフは「斜めの関係」であることが明らかとなった。また、フリースクールスタッフも「斜めの関係」であり、フリースクール全体が在籍生にとって「斜めの関係」になっていることも明らかとなった。さらに、フリースクールスタッフは近い心的距離におり、学校は遠い心的距離にあることが明らかとなった。

## 【キーワード】

斜めの関係、フリースクール、不登校、大学生ボランティア、KH Coder

## I. 問題

### 1. 不登校について

教育分野における大きな問題として、不登校児童生徒の数の割合の増加があげられ

る。ここで言う「不登校」とは「何らかの心理的・情緒的・身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくてもできない状況に当たるために、年間

30日以上欠席したもののうち、病気や経済的な理由によるものを除いたもの（文部科学省，2019a）」を指している。文部科学省の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果（文部科学省，2019a）によると、平成30年度の不登校児童生徒の数は小学生で約4万5千人、中学生では約12万人にのぼっており、小・中学生合わせて初めて16万人を超えた。また、文部科学省（2019b）は不登校児童生徒への支援の視点として、「学校に登校する」ことだけが目標ではなく、進路を主体的に捉えて、社会的自立を目指すことが目標であると述べている。そのために、児童生徒の才能や能力に応じて、教育支援センターやフリースクールなどの民間施設を活用して支援を行うことの必要性も述べられている（文部科学省，2019b）。文部科学省（2019a）によると、学校外の機関などで相談・指導を受け、指導要録上出席扱いとした児童生徒数は年々増加しており、平成30年度では小学生で約5000人、中学生では18000人が出席扱いになっている。

## 2. 斜めの関係について

### 1) 笠原の研究

笠原（1977）は大学生の不登校であるスチューデントアパシーの治療としての精神療法について述べている。ここでいう精神療法とは相手に対する共感と理解から相手の精神的成長を促し、効果を待つ長期的な方法を指している。その長期的な精神療法に不可欠な条件として「中立的関係」を挙げている。

笠原（1977）によると青年の精神療法の拒否の理由として①病識欠如、②症状が本

人にとって苦痛なものではない、③成人敬遠の心理の3つを挙げている。青年にとって治療者は「成人のかたくなアイデンティティ」を持った存在であり、自身のあやふやなアイデンティティを脅かされると恐れる。さらに、友人は「成功者としてのどっしりとしたアイデンティティの持ち主」に見えてしまい、友人が近づくことも恐れてしまう。そうした「成人アレルギー」をもつ青年に唯一近づきうる方法として叔父—甥（叔母—姪）的關係を挙げている。その関係を父—息子という直系的関係に対して「斜めの関係」と呼んでいる。「斜めの関係」とは叔父の立場を構成できる人を指しており、年の離れた先輩—後輩関係も「斜めの関係」の一つとした。

### 2) 吉村（2000）の研究

吉村（2000）はこれまで関わってきた中学、高校生相当の年齢の子どもたちの不登校と社会化問題を取り上げ、各事例から考察をしている。「斜めの関係」である若夫婦や親戚のおじさんが不登校支援に有効であることが、事例をとおして報告されている。また、吉村（2000）は生徒の訴えに対して文字通りに受け止め、硬直的な見方をすることも“縦”とした。親や教師は「直線的な関係」であり、言動を文字通り受け止めてしまう。そうした中で、視点を少しずらしたところから見てくれる人間の存在が、思春期の子どもを幅広く支えることを見出している。

さらに、吉村（2000）は不登校生徒が組織上の関係、（例えば、教師—生徒といった）ではない別種の社会的関係の中で、社会と自分の関係を確認できることが成長を

支えることを報告している。

### 3) 豊嶋 (2004) の研究

豊嶋 (2004) は「大学生・大学院生等による適応指導教室通室生サポート活動が、不登校生の適応や動機付けに果す機能を探る実践研究プロジェクトの成果の展望」と適応指導教室を対象とした多くの先行研究から「斜めの関係」の理論的考察を行った。

笠原 (1977) は「斜めの関係」の本質を「地位—責任関係」と述べている。笠原 (1977) の理論によれば「斜めの関係」ともとれる教師」であっても、教師という地位・責任を逃れられるわけではないため成立しないと豊嶋 (2004) は指摘している。そこで豊嶋 (2004) は「斜めの関係」の本質を「地位—責任関係」ではなく「視点と座標系の転換」、「地位標高差の変換」にあると述べた。「視点と座標系の転換」とは、承認・共感的関りを含めた児童生徒の内面の気づきと他者への配慮性を前提として教師中心の視点から児童生徒中心の視点転換をすること、外面的な関心から、背景・内面への焦点移行することを指している。次に、「地位標高差の変換」とは①もともと立場が違う人間が同じ立場で同じ行動をし、地位差を感じさせない関係性になっていくこと、②本来下の立場である子どもからの気遣いを受け入れることを指している。

### 3. フリースクールについて

フリースクールとは不登校の児童生徒の学習を支援する民間施設のことである。民間施設であるため、学校教育法で定められ

ている「学校」ではない。しかし、施設によっては施設に通学することで出席扱いとして認められているところもある。

加瀬 (2017) はフリースクール等の取り組み促進のために必要な外部組織・団体からの支援に対するニーズを明らかにすることを目的として、アンケート調査を行った。フリースクール等368件にアンケートを郵送し、118件から回答を得られた。また、フリースクール等それぞれの特徴などを活かしつつ、社会的認知を得るための方法として、加瀬 (2017) が考案した「自己評価シート」に対する意見を集約し、分類・整理を行った。

その結果、団体・施設の類型は「フリースクール (フリースペースを含む)」が最も多く、全体の67%であった。週当たりの開所日数は平均4.7日であり、全体の54%が「4日」であった。義務教育段階以外も含めた在籍者数の15%が小学生であり、45%が中学生であった。スタッフ・ボランティアの人数は1施設・団体あたり、10.9人であり、そのうち雇用関係のある、常勤・有給スタッフは2.2人であり、ボランティアスタッフに支えられている部分があることがうかがえる。

不登校と「斜めの関係」に関する先行研究はすべて適応指導教室が対象となっている。上述したようにフリースクールの社会的な地位は上昇している。これまで適応指導教室を対象とした先行研究と同様に、フリースクールのボランティアも不登校児童生徒にとって「斜めの関係」として位置付けられているかもしれない。

## Ⅱ. 目的

以上のことからフリースクールに在籍している中学生にとって大学生ボランティアとの関わりがどのような心理的位置関係にあるのかを質的に検討を行う。

## Ⅲ. 方法

### 1. 調査協力者

フリースクールに在籍している中学生で研究の同意が得られた3名を調査対象者として選定した(表1)。

表1 インタビュー協力者(フリースクール在籍者)のプロフィール

協力者	学年	性別	在籍期間
Aさん	中学3年生	女子	中2の4月～現在
Bさん	中学2年生	女子	中1の10月～現在
Cさん	中学2年生	女子	中2の5月～現在

### 2. インタビュー時期

2019年7月上旬～9月下旬

### 3. 調査手続き

研究の趣旨などについて説明し、同意書への署名を求めた。同時に撤回書についても説明を行った。なお、Aさん～Cさんは未成年者のため、フリースクールスタッフを通して事前に保護者の同意を得ている。同意書にはフリースクールスタッフに代筆をお願いした。インタビューは逐語化して分析を行うために、許可を取ったうえで、ICレコーダーにてインタビュー内容を録音した。インタビュー実施場所としてフリースクール、連携高校に許可を得て、プライバシーが保護されているフリースクール、連携高校内の空き教室で実施した。なお、インタビュー時間は30分程度とした。

### 4. インタビュー内容

インタビューでは半構造化面接を採用した。項目は下記のとおりである。なお、ここで言う「フリースクールスタッフ」とは、常勤スタッフのことを指しており、基

本週5日勤務している。「ボランティアスタッフ」とは大学生などの学生ボランティアを指す。ボランティアスタッフは基本的には週に1回1日の参加となっている。

- 1) あなたがフリースクールに在籍し始めた時期を教えてください。
- 2) フリースクールのボランティアスタッフはどのような存在ですか。
- 3) フリースクールのスタッフ(先生)はどのような存在ですか。
- 4) フリースクールスタッフ(先生)とボランティアスタッフの違いはありますか。
- 5) 在籍している中学校の先生とフリースクールのスタッフ(先生)の違いはありますか。
- 6) フリースクールに在籍して何か変化はありましたか。

### 5. 分析方法

「KH Coder」(樋口, 2014)の計量テキスト分析における分析法の1つである、共起ネットワークを用いて質的データを整理した。

### 1) 共起ネットワーク

共起ネットワークとは出現パターンの似ている語どうしを線で結んだネットワーク図のことである（樋口，2014）。共起ネットワークでは線でつながっていることがそのまま語と語の共起を示すため、多くの人にとって理解しやすい可視化と言える（樋口，2014）。今回の研究では、社会ネットワークで言う「中心性」による色分けを行った。「中心性」とは、それぞれの語がネットワーク構造の中でどの程度中心的役割を果たしているか、重要性を表しているかを示すものである（樋口，2014）。黄色<緑<青の順に中心性が高くなることを示している。

### 2) KWICコンコーダンス

KWICコンコーダンスでは分析対象ファイル内に抽出語がどのように用いられているのかを検索することでき、その検索機

能・検索結果のことを「KWIC: Key Words in Context」もしくは「コンコーダンス」と呼ぶ（樋口，2014）。本研究ではコンコーダンスの機能を用い、検索した語とその前後24文字で構成された文章を抽出した。その文章の不要な部分を省略し、見やすくしたものを使用例として載せた。

### 3) 共起ネットワーク図の採用基準

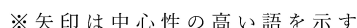
本研究では、語の出現回数を2回から順に共起ネットワーク分析にかけた。共起ネットワーク図の採用基準は以下のとおりである。

- a. 中心性の高い単語数が多い
- b. 共起ネットワーク図内の単語数が多い

## 6. 倫理的配慮

本研究は跡見学園女子大学研究倫理委員会において承認を得ている（承認番号19-003）。

### 1) Aさんの結果と考察



分析では、語の最小出現回数2回から順に共起ネットワークにかけた。Aさんは3回の共起ネットワーク図を採用した(図1)。中心性の高い単語として「人数」、「前」、「子」、「距離」、「学校」、「U(フ

表2 Aさんのコンコーダンス「人数」の使用例

– 194 –

	<p>い</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の先生は<u>人数</u>が多いじゃん生徒の。だから結構距離がある気がする。でもこっちは<u>人数</u>が多いわけじゃないから結構近くなる。いろんな趣味とかがあるからいろんなこと知れる。学校は同じ</li> <li>・固まったりするから、他の趣味とかはわからない。でもこっちはアニメとかの話ができる。<u>人数</u>が少ないからだと思う。こっちはすごく多いからグループにすごい分かれるけど、こっちはみんなでいること</li> <li>・てた。初日はめっちゃ緊張した。でも楽しかった記憶がある。みんなと話せた。最初は<u>人数</u>も少なくて、K（フリースクールスタッフ）が同じ時期に入ってきたからよく話してた。一回、女子</li> <li>・韓国好きなボラさんがほしい。自分の趣味とあったらいっぱい話せそうだから。<u>人数</u>は今くらいでいい。多いときもあるし、少ないときもあるけど、Aは気にし</li> </ul>
--	---

表3 Aさんのコンコーダンス「前」の使用例

前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話そうと思ったこともない。自分の友達のこの話はしてた。自分の<u>前</u>の席の子が、その<u>前</u>の子のペンを奪って、それを話して解決してもらった。そういうのが多かったか</li> <li>・体育も楽しかった。こないだは公園に行ってブランコのったり、ボールで遊んだりした。来る<u>前</u>は家にずっといて楽しくない。ずっとユーチューブ見てた。H（フリースクール）に来て関わる機会が増えた</li> </ul>
---	---

表4 Aさんのコンコーダンス「距離」の使用例

距離	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常会話も全然話せる。学校の先生は人数が多いから一人ひとりの解決してる時間があるあんまりないから<u>距離</u>が空いちゃう。男の先生だったからもっと話しにくい。K（フリースクールスタッフ）はなんか話せる。</li> <li>・にはなったって感じ。学校は本当に先生って感じ。先生だけど、先生って感じしない。<u>距離</u>が近いし、一人ひとりの性格とかに合わせて話してくれるからかな。学校は教科によって先生</li> <li>・あんまり変わらない気がする。どっちも気を使わなくていい。近い気がする、<u>距離</u>が。学校の先生は人数が多いじゃん生徒の。だから結構距離がある気がする。でもこっち</li> <li>・でいい。近い気がする、<u>距離</u>が。学校の先生は人数が多いじゃん生徒の。だから結構<u>距離</u>がある気がする。でもこっちは人数が多いわけじゃないから結構近くなる。いろんな趣味とか</li> <li>・ボラさんっていうから「ボラさん」っていう感じするけど。けど、お兄ちゃん、お姉ちゃん。一番<u>距離</u>が近いのはJ（フリースクールスタッフ）とかK（フリースクールスタッフ）で、ボラさん。I（連携高校）の先生はこの辺。</li> <li>・あるけど、Aは気にしない。今のままでいい。変わらないと思う。結構近い<u>距離</u>にはいるけど。ボラさんって何曜日に来る人が決まってるからかな。こっちは毎日いる</li> </ul>
----	--

ボランティアスタッフに対して「ボラさんっていうから『ボラさん』っていう感じするけど。けど、お兄ちゃん、お姉ちゃん。」「結構近い距離にはいるけど。」と語られている。Aさんの語りから、ボランティアスタッフは「斜めの関係」として、心的距離が近いことが示唆された。

また、ボランティアスタッフとフリースクールスタッフの違いに関しては「あんまり変わらない気がする。どっちも気を使わなくていい。近い気がする、距離が。」と述べており、フリースクールスタッフとボランティアスタッフの違いがあまりないように感じているようだ。それに加えて、フ

リースクールスタッフに対して「先生だけど、先生って感じしない。距離が近いし、一人ひとりの性格とかに合わせて話してくれる」、「先生だけど友達みたいに話せる。」と語られている。以上のAさんの語りから、フリースクールスタッフもボランティアスタッフと同じように「斜めの関係」として認識されていることが示唆された。

豊嶋（2004）の研究報告では適応指導教

室における「斜めの関係」が適応促進機能を持つと述べられている。「H（フリースクール）に来て関わる機会が増えた。今いる子たちといっぱい遊びたい。受験生だけど、こっちに来た方が楽しい。」と語られている。よって、フリースクールにおいても同様の現象が起きていると考えられる。

## 2) Bさんの結果と考察

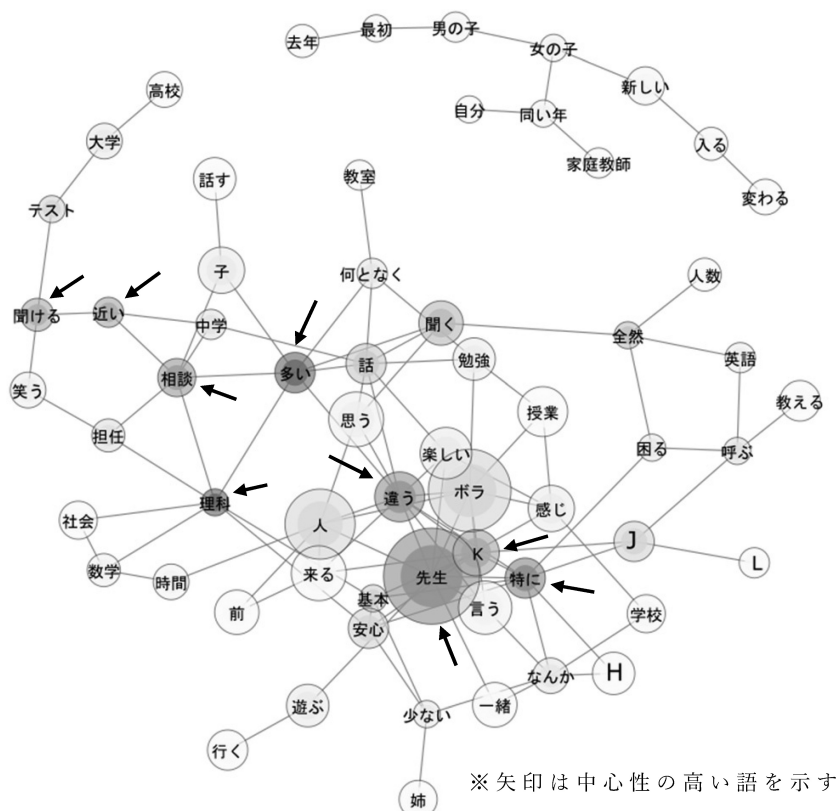


図2 Bさんの最小出現回数4回のネットワーク図

分析では、語の最小出現回数2回から順に共起ネットワークにかけた。Bさんは4回の共起ネットワーク図を採用した（図2）。中心性の高い単語として「多い」、「理科」、「違う」、「先生」、「特に」、「聞け

る」、「近い」、「相談」、「K（フリースクールスタッフ）」が得られた。また、その単語が発話内でどのような使われ方をしているかを以下に掲載する（表5～7）。



表5 Bさんのコンコーダンス「違う」の使用例

違う	<ul style="list-style-type: none"> <li>・J（フリースクールスタッフ）の方が言いやすくて。それが定着しちゃいました。<u>違い</u>は特に。呼び方が<u>違う</u>だけ。</li> <li>・全然、結構<u>違い</u>ますね。まず、距離感が全然<u>違い</u>ます。中学の先生って生徒がH（フリースクール）より全然多いんで、一クラス30何人。</li> <li>・と道德くらいしかないんで。やっぱり担任って言っても担任感があんまりないので。でもそれと<u>違って</u>H（フリースクール）の先生って誰かが授業に入ってもいるじゃないですか、後ろとかに。</li> <li>・ボラさん。ボラさんっていうと、F（ボランティアスタッフ）しか出てこない。ボラさんは先生とは<u>違う</u>ので。ちょっと年上のお兄ちゃんお姉ちゃん的な。H（フリースクール）の先生とは<u>違う</u>。K（フリースクールスタッフ）とかでもいつもいますけど、やっぱり時々下に行っちゃう。でもボラさんって基本教室に</li> <li>・基本F（ボランティアスタッフ）しかいないけど、1人いるだけで安心感が<u>違い</u>ます。いないと1回K（フリースクールスタッフ）が下降りちゃったりJ（フリースクールスタッフ）が下降りちゃったりすると、先生</li> <li>・なって心配になってくる、勉強とか。F（ボランティアスタッフ）いるだけで勉強の時の安心感が<u>違う</u>。それがたとえ英語でも社会でも理科でも何でも。なんとなく安心感があって。</li> <li>・ボラさんはどちらかというとながら話すっていうよりちょっとした相談とか。話す内容が<u>違う</u>かも。先生の方がこれは言ったら解決してくれそうだなっていうのは先生に言っ</li> <li>・たちも今度テストあるなって思ったり。同じ学生ってところなのかな。大学生と中学生じゃちょっと<u>違う</u>けど、なんとなくテストとかっていうと、大学生でもテストあるんだとか。あとは大学の話を聞いたり。これからの先、色んなボラさん、ボラさん結構大学<u>違う</u>ので、心理系のひととか保育系のひととか社会人のひととかの大学の話を聞いたり</li> <li>・ひとくくりなので。こんな大学あるんだ、大学ってこんな授業あるんだとか。授業ってちょっと<u>違う</u>じゃないですか。例えば体育ないって言ってる人もいればあるって言ってる人もいて。</li> <li>・て、嫌だなって思っ行って行きたくないなって思っちゃったんですけど。生徒が前と<u>違う</u>タイプの子が入ってくるんで。こういう子どうしようって思ったりして。</li> <li>・とやっぱりボラさんってなっちゃう。でもその時に新しいボラさんだによって紹介がなかったから、<u>違う</u>のかなとかも思ったり。</li> </ul>
----	--

表6 Bさんのコンコーダンス「近い」の使用例

近い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特に人数が増えたからと言って何かあるわけではない。人数が増えると学校と<u>近く</u>なるけど、年齢がみんな別々なので。小学生もいれば中学生、中3、中2、中1</li> <li>・でうれしいですね。安心してできます。同じ教室にいれば何となく安心する。まとめると距離が<u>近い</u>になっちゃう。教室にいるっていうのが一番かな。話しやすくて。中学の先生はちょっと</li> <li>・ちょっとすれば時間を作ってくれたり放課後に話を聞いてくれたりする。距離は先生よりは<u>近い</u>と思います。自分がいて、中学の先生はほんと遠い。K（フリースクールスタッフ）、J（フリースクールスタッフ）は本当に近くて、さらにその前にボラさんが来ると思う。<u>近く</u>て楽しめる。なんとなく先生より、ラフ。やっぱり勉強の話をしてたり、明日テストだよ</li> </ul>
----	---

表7 Bさんのコンコーダンス「相談」の使用例

相談	<ul style="list-style-type: none"> <li>・がH（フリースクール）より全然多いんで、一クラス30何人。やっぱり困ったことがあったときにすぐに<u>相談</u>しづらい感じがして。H（フリースクール）の先生ってなんか困ったことがあればちょっとって言って、話し</li> </ul>
----	---

- ・やっぱ忙しそう。雰囲気的にいつもなんかやってたりすると話しかけづらい感じが。雑談相談も。相談になると特に。教卓のところとか近づきたくないなって。H（フリースクール）って先生のいるところっていうのが
- ・ボラさんはどちらかというとながら話すっていうよりちょっとした相談とか。話す内容が違うかも。先生の方がこれは言ったら解決してくれそうだし
- ・ってわかってきてるので、今回はこの人のところいこうってなりますね。内容とかで相談相手を決められる。中学だと一人しかいないので。担任の先生しか。あとは理科
- ・の先生、数学の先生っていますけど、そういう先生って一時限とか一つの時間しかいないと相談しづらいです。スクールカウンセラーの人もいますが、そういう先生ってそういう子が多いので忙しそう。そういう先生にも相談はしづらくなって。だからここは相談しやすい。しようと思えばちょっとって言ってあとから。今は忙しいときとかはちょっとすれば

学校は相談できる相手が担任やSCと限られている中で、担任は怖いイメージであり、SCは忙しそうなイメージから相談できずにいる。それに対して、フリースクールであれば、スタッフ、ボランティアスタッフと内容によって相談相手を選ぶことができる。悩みはスタッフに相談するが、ちょっとした相談はボランティアスタッフにするなど、ボランティアスタッフとのこれまでの関わりを考えたうえで相談する相手を選ぶことができる。

また、ボランティアスタッフは遊んでくれるお兄ちゃん、お姉ちゃんであり、常に教室にいて遊んだり、勉強を教えてくれたりすることで安心感を与えている。フリースクールスタッフと比べてボランティアスタッフの方が、勉強などの身近な困りごとに対しては聞きやすい。また大学生のボランティアスタッフとテストなどの共通の話題があることで、大学生と中学生の違いはあるが、同じ学生という感覚をもっている。同じ学生という立場から大学の話聞くことで将来に対するプラスのイメージを抱いていることも考えられる。これらのことから、Bさんにとってボランティアスタッフはスタッフより近い距離にいることが

何え、「斜めの関係」として機能していることが示唆された。

中学校の先生と比べるとフリースクールスタッフも近い距離にいるが、常に教室にいないことでボランティアスタッフよりは遠い距離にいるようだ。Bさんは今年度赴任してきたJ（フリースクールスタッフ）に対して、初めて会った際に、紹介がなかったことからボランティアスタッフだと勘違いしていた。このフリースクールにおいては年齢が近く見えることで初期の段階でフリースクールスタッフもボランティアスタッフに近い立場をとれることが考えられる。

フリースクールスタッフも学校の先生とは違い、近くに感じていることからフリースクールスタッフも「斜めの関係」として機能していると概ね考えられる。

Aさんはフリースクールスタッフとボランティアスタッフの違いはあまりないと捉えていた。その一方で、Bさんはフリースクールスタッフとボランティアスタッフを違う存在として捉えている。そのため、AさんBさんに共通して、フリースクールスタッフも「斜めの関係」として捉えていると考えられるが、細かく見ていくとBさんと

### 3) Cさんの結果と考察

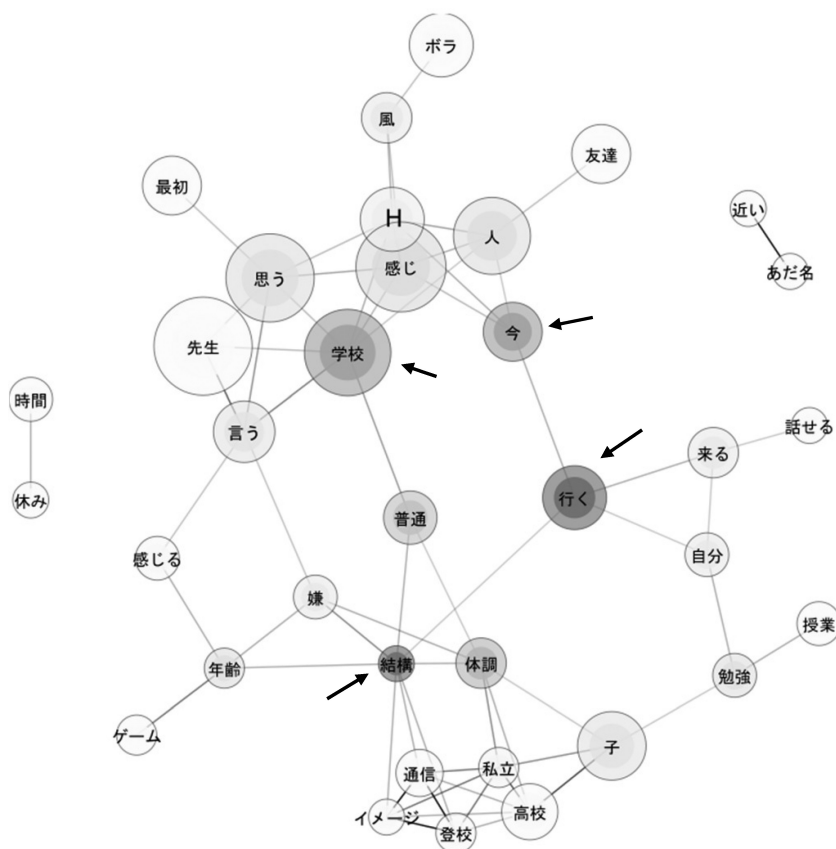


図3 Cさんの最小出現回数4回のネットワーク図

「結構」、「学校」、「今」が得られた。また、その単語が発話内でどのような使われ方をしているかを以下に掲載する（表8）。

表8 Cさんのコンコーダンス「学校」の使用例

学校	<ul style="list-style-type: none"><li>・は仕方ないけど。先生たちも含めて、年齢による違いはあまり感じない。普通の<u>学校</u>の先生よりも気遣ってくれる。普通の<u>学校</u>の先生たちは対応が雑。休みでできればこうしてほしいって。先生たちが確実にこう</li><li>・なってしまう。H（フリースクール）は結構自由な感じのできるから。個性を伸ばせるようなところだなんて。<u>学校</u>よりも課外学習が多くて。普通<u>学校</u>じゃできないような稲刈りとか体験させてもらって。そういうの体験すると変わるかなって</li><li>・H（フリースクール）の方が距離感が近いと思う。H（フリースクール）はみんなぎゅうぎゅうでくっついてるような状態。<u>学校</u>は話す人とは話すけど、話さない人はすごい</li></ul>
----	--

遠くにいるような。先生たちとも距離が近いなって、H（フリースクール）の方が近い。学校はちょっと部活で忙しいからとか言われる。ちょっと遠いなって。フランクに話しかけてくれる。あとはなんだろう。学校の先生は給食食べるのもなんでも別とかで話す機会がなくて。今どこにいる

- ・先生は距離も近くてあだ名もつけてくれるから。あだ名で呼ばれるのって面白いなって思う。学校であだ名で呼ばれるのは絶対ない。あだ名で呼ばれることはプラスかな。むしろそれで自己
- ・てきて。L（フリースクールスタッフ）はL（フリースクールスタッフ）って呼び始めたからL（フリースクールスタッフ）で落ち着いたんだと思う。学校の先生とは違うものの。先生って言っても、過酷な感じ。あたりの強い先生だなんて感じる、普通の学校の先生は。H（フリースクール）の先生はもっと優しくて。I（連携高校）の先生はH（フリースクール）の先生って感じ。
- ・ちょっと面白くしてくれたり、わかりやすいし。大丈夫、授業ついていける？って心配してくれてる。学校が嫌い、先生が嫌いっていうよりは、受け入れきれない学校に抵抗がある。それこそ、私は体調によって来る時間もかわるし、勉強もちょっと追いつけ
- ・てから自分でも明るくなったなって。あとは勉強をよくするようになった。去年の学校に行ってた頃とかH（フリースクール）にくる前の市のフリースクールみたいな、そういうところに行ってた時
- ・して、資格、英検とか漢検とか数検とかをとっていきたいなって思う。学校も体調がよくなったら普通の私立頑張ろうかなって。私立高校。本当に私立の受験を考え

フリースクールスタッフ、ボランティアスタッフとの関わりによって、性格が明るくなったこと、勉強するようになったこと、体調がよくなってきたことが語られている。フリースクールでの生活を通して様々なことが前向きになっていると考えられる。また、体調に不安を抱えているCさんにとって、学校は「雑」な対応でありCさんにはあっていなかった。その一方でフリースクールではスタッフが気遣ってくれること、勉強面での個別の配慮をしてくれるため、フリースクールのような個別に対応してくれることが適応促進機能を持っていると考えられる。加えて、普通の学校ではできないような体験学習ができる点、通室生があだ名で呼ばれている点もCさんにとってはプラスに作用していることが示唆された。

ボランティアスタッフはCさんにとって魅力的な存在であり、ボランティアスタッ

フとの関りから「フリースクールに来た子を明るくさせられるような子になりたい」と目標を掲げている。そのために勉強に対する姿勢も変わってきていることから、ボランティアスタッフは身近な目標となっていることが考えられる。

半構造化面接の「(2)ボランティアスタッフはどのような存在ですか」に対して「個性的。(省略)ボラさんが最初いたからH（フリースクール）にこういう風に来れるようになった」と語られていることからボランティアスタッフが「斜めの関係」として機能していることが伺える。また、遊びにおいて「大人とか子供とか関係ない」というスタッフの姿勢をプラスにとらえていること、フランクに話しかけてくれることから、フリースクールスタッフも「斜めの関係」として機能していることが示唆された。

## V. まとめ

フリースクールに在籍している中学生3名に対して半構造化面接を行った。計量テキスト分析の結果、インタビューからはボランティアスタッフが「斜めの関係」であることが示唆された。さらに、フリースクールスタッフも含め、フリースクール全体が「斜めの関係」になっていることが示唆された。フリースクールスタッフとボランティアスタッフはどちらも「斜めの関係」ではあるが、若干の違いがあることも示唆された。しかし、その違いについては過ごしている時間に関するものや話す内容の違い等調査協力者ごとにさまざまであった。フリースクール全体が「斜めの関係」として、在籍生の適応や発達を促していることが示唆された。そのため、「斜めの関係」を学校に取り入れることで、児童生徒の適応発達が促されるだけでなく、不登校児童生徒の対策として効果がみられるのではないかと考える。

今回、インタビュー協力が得られたフリースクールは1校であり、協力者は女子生徒のみであった。フリースクールでの関わり方は各団体・施設によって異なってくると考えられるため、施設・団体、インタビュー協力者の幅を広げていくことが今後の課題である。また、上述した事項が実証的研究アプローチによって明確にすることも今後の課題とする。

## VI. 謝辞

この修士論文を執筆するにあたり、多くの方から多大なご協力、ならびにご指導、ご支援を賜りました。ここで厚くお礼申し上げます。

調査実施のために貴重な時間を割いて協力して下さった調査協力者の方々とフリースクールのスタッフさん、調査場所を提供して下さったフリースクールおよび連携高校の先生方、相談に乗ってくれた友人、積極的に意見をくれた後輩に心より感謝致します。

## VII. 引用・参考文献

- 樋口耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して—— ナカニシヤ出版
- 笠原嘉 (1977). 青年期 精神病理学から 中央公論社
- 加瀬進 (2018). フリースクール等の支援の在り方に関する調査研究報告書  
<http://www.we-collaboration.com/mt/20180330%20free%20school.pdf> (2019年11月10日)
- 小森聖子・豊嶋秋彦 (1999). 不登校の学校要因と人格要因(1)衛生要因——不登校生徒における動機付け—— 東北心理学研究, 49.
- 文部科学省 (2019a). 平成30年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について  
<https://www.mext.go.jp/content/1410392.pdf> (2019年12月12日)
- 文部科学省 (2019b). 不登校児童生徒への支援の在り方について (通知)  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm) (2019年12月12日)
- 王美玲 (2011). フリースクールの学校化プロセスと展望——不登校特区への転換と教育理念の実践—— やまぐち地

域社会研究, 9, 183-194.

田中未央・久米川浩子・豊嶋秋彦  
(2002). 適応指導教室に通室する不  
登校生徒の適応——非適応要因——  
東北心理学研究, 52.

豊嶋秋彦 (2004). 教員養成学の構造から  
みた不登校生のサポートと「斜めの関

係」——対人専門職への社会科学研究の  
実践的理論的意味—— 弘前大学教育  
学部紀要特集号, 27-42.

吉村順子 (2000). 教育環境における斜め  
モデルの提唱 金沢経済大学論集, 32  
(1), 83-96.